
ドジとヘタレと残念な天才

九条 ネギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドジとヘタレと残念な天才

【NNコード】

N4965N

【作者名】

九条 ネギ

【あらすじ】

知能の限界。 それが、人類の進化をとめた。

前置き

皆さん、質問です。
天才って何ですか？

ありふれた小さい子がするような質問に、大人が答えるなら。
それは大体が、こう答えるだろう。

「物知りで、とても頭の良い人だよ」

一般的に、そんな所。 けれど、中々どうして。 とてもよくい
るんだ。

必然が、天才の皮を被つてている。

もう少し、深く考えてみよう。

物知りでなかつたら、天才ではないのか？
物知りでなければ、天才なのか？

答えは、なんでもない。 ただ、それは物覚えがいいだけ、悪い
だけの違いだ。

本物の天才は、存在する。

知らぬはずの計算式を、瞬時に考案し、使用してしまう。

知らぬはずの出来事を、予測してしまう。

必要最低限の情報と、知恵だけで。 その知識を広げていく存在
は、居るのだ。

もし、天才がただの物知りだったとしよう。
もし、馬鹿がただの無知だったとしよう。

分からぬ事があれば、考えるか？ 計算式の分からぬ問題に
直面すると、止まってしまうのか？

いいや、そんなことは無い。化け物染みたその頭脳で、いつも
たやすく答えを口から吐き出してしまってのだ。

知識が無ければ天才でないといふのであれば。

学校の授業を聞き、塾で勉強して。自主的に勉強する人間はそ
の全てが天才であり。

逆に、塾は愚か。学校へ行く事もままならない人間は、天才に
はなりえないのか。馬鹿なのか。

知識が無くとも、知能さえあれば……なりえる。知能が異常な
までに高い者を、天才と呼ぶのだ。

少なくとも、これから全てを知る彼は天才ではないだろう。
少なくとも、才能ではないのだから……天才では、無いだろう。

プロローグってヤツ

.....。

「…………退屈だ

ゆつくつとした動作で。彼は肘掛椅子から、テーブルへと手を伸ばした。その手の先には、大きなマグカップになみなみ注がれたコーヒーと、器に入った角砂糖がおいてある。

いくつか角砂糖を手に取ると、彼はコーヒーの中にそれを放り込んだ。それをマグカップの横に立てかけてあつた長いティースプーンでかき回すと、器用にも片手でミルクを注ぐ。

そしてそれをよつやく、口元へ近づけると、彼は一気に飲み干した。

「……しまった、寝れない」

「コーヒーのカフェインのことと言っているのだろうか？ 彼は面倒くわそうに頭を搔くと再びテーブルに手を伸ばし、新聞を手に取つた。

直ぐに彼は番組欄に目をやるわけだが、その新聞の一面を飾るようだ。『学生、黒糞童子氏の快挙。六学賞、三冠達成』と言う見出しの中、彼が面倒臭そうに手を振つている写真が貼り付けられている。

受賞したのは、物理学賞、化学賞、生理学・医学賞の三つ。その他にある、文学賞、平和賞、経済学賞などは彼には無縁なもの。恐らくは、彼がその気になれば総なめしてしまつとまで言われているくらいだ。だが、彼に言わせれば「物理学賞と化学賞を獲つたら平和賞は絶対に獲れない」らしい。

それ以外にも、文学賞は自分にはその案件の内容が浮かばず。経済学賞に関しては、賞金を直ぐに趣味の遺跡発掘などに使い果たしてしまっため、性格上、獲るつもりはないという。

「……天才とか、居ないのに何言つてんだか」

呆れたように。彼……黒薙童子は新聞をダストボックスへと放り込んだ。

そこでタイミングよく掛かつてきた電話の受話器をとると、面倒臭そうににまた出るわけだが。今回、彼はその電話の相手に対し、何も言わないまま受話器を元の位置へと置いた。

そして、部屋の鍵が閉まっているのを確認し、なり続ける電話を無視するように。ヘッドホンをつけると、大音量でラジオをつける。

それも、ノイズ音のみ。

「うつぜえ。……いい加減にしろよな、断末魔を上げる機械兵の開発協力とか。勘弁しろよ」

ただそれだけ。それだけの言葉を吐き出すと、彼は気持ち良さそうに寝息を立て始めた。

* * * * *

「被害状況はどうだ？」

とある部屋の中。多数のモニターを相手に、一人の男が指示だしをしている。

一体何の指示か。それを聞かれれば「人を殺す指示」と答えるのが恐らくは、最も的確だろう。彼はこの戦争に、誇りを懸け、命を懸けている。だが、そんなこと。

関係ない人間からすれば、迷惑以外の何者でもないのだ。

『駄目です。アンチロイドが銃撃により破壊されました！』

「……クソ！ これでは相手に戦闘機を使う許可を与えたようなもんだ、断固として戦闘機の出撃だけは阻止しろ！」

男は、モニターに対して怒鳴る。そんな男の後ろに、一人の女

がメモを片手に、会話が終わるのを待ち、佇んでいた。

「どうだった？ イザベラ、良い返事は聞けたか？」

男の問いに、彼女は首を横に振った。

「いいえ、一度は受話器をとりました。ですが、私の声を聞いた途端、電話を切つてしまい、以後五分間鳴らし続けましたが返答はありませんでした」

「……そうか、ならば迎えを送れ。何としてでも、黒薙童子を我々の管理下におくのだ」

「承知致しました」

プロローグハヤツ（後書き）

六学賞……ノーベルそのまんまです。

プロローグつてヤツの少し後

彼、黒薙童子は目の前に。高さ一メートルほどガラス管の中の緑色の液体に浮き沈みする人のような形の物体を、ガラス越しに見つめている。その中のそれは、時々手足を動かし、体勢を変える。

真紅の瞳で周囲を見渡し、童子を見つめ、屈託の無い笑顔を向いた。尻尾のような部位を、上機嫌で振っている。

「……めんな……お前の事、造っちゃって。一年間もこの中なんだよな……こんな俺の家に閉じ込められて、殺風景な部屋に、こんなガラス管に閉じ込めちまつて……ごめん」

童子はガラス管の台についているスイッチに手を伸ばすが、それを押すのを躊躇つように。その手を引っ込んだ。この緑色の液体……培養液を排出すれば、コイツはほぼ間違いなく死ぬだろう。急すぎる環境の変化に対応できず、恐らくは。相当な確率で、鼓動に異常をきたし、死ぬ。

だが、殺せない。いつまでも生かすことなんて出来なければ、自分がこの家を三日以上離れれば管理が出来ず、恐らくは……。

「二年前の依頼……断つておけばこんな事にはならなかつたのによ」

後悔、先にたたず。

この誕生は二年前の、政府からの依頼。『断末魔を上げる人工兵士の製造』を、馬鹿な自分が行ってしまったのが原因で。それ以降、こいつを守ることにばかり手を焼いている。

訪問者が来れば地下へ隠し、コイツの存在は恐らく。依頼してきた政府の連中ですら、未だに確認していないはずだ。『現段階では依頼は遂行不可能だった』と報告していれば、この研究は政府

が既に独自開発している。聞いた話では、クローン技術により兵隊は完成し、後はガラス管から出す方法さえ確立できれば完成なのだと言う。

だが、そのガラス管から出す方法は……今のところ無い。と言うより、あることにはあるのだが、成功率は恐ろしく低い。

元々、ただのクローン技術と遺伝子をゼロから造ると言つ自己開発した技術の併用で、ゼロから作られた遺伝子で造られたこいつに限り。ガラス管を叩き割るだけで外へ出て産声を上げる可能性はあるのだが……。彼の計算結果では、二十八兆六千七百分の一という超低確率であり、殆ど夢を見ているような状態なのだ。

「なあ、お前は死にたいか？……意味わかんないうちに死ぬのは嫌だよな？……外に出たいよな？」

童子は部屋の壁に備え付けてあつたパソコンの電源を入れると、足元に立てかけて合つた工具を放り出し、キーボードを叩き始めた。なにやら計算式がものすごい速さで組まれ、瞬く間に画面が下へとスクロールしていく。それを見逃さぬよう、童子は瞬きもせず、その羅列を見つめている。そして、一時間掛かりで、彼の手が止まった。

彼の手が、キーボードを叩く。そして、エンターを押すとガラス管のCGグラフィックが表示された。「……今日はツイてる。

ようやく、マトモな結果が見つかつたか。……コイツは……予想外だな。……誰か、あいつの見たことの無い人間……女が良い。手伝いを頼む相手が……」

「どうかなさいましたあ？」

突然の声の主に対し、童子は動いた。素早い動きで、手近に合つた椅子を投げつける！が、声の主は、それを容易く避けると、童子に対し……その手に握った銃の銃口を突きつけた。

「……薬とコーヒー臭いですねえ。特にその変なガラス管から、

臭います。……あ、私は政府の軍事戦略機関に籍を置いてあります。如月 尊と申します」

黒いスーツの女が、童子を呆れたような目で見ている。

「この様子じゃ、一年前の依頼は恐らくキツチリ出来上がつてたにも関わらず……我々に嘘の報告をしたとお？」

ふざけたような口調が、静かな室内に響く。

「……どうやって入ってきた？ 家の鍵は閉めていたはずだ……それに、地下は鉄板みたいな扉がガードしていたはずだが？」

童子の言葉に、女はガス切断機を見せる。

「どうやら、相当集中して研究中だったようですねえ。 けど、スマセン。 私と、『同行願えませんか？』なに、たつた五日ほどですのでえ」

「……当然断る。 三口家を空ければ、あいつが死んじまうからな」

童子はガラス管に入ったそれを指差し、反発する。 すると彼女は呆れた様子で、ガラス管に対し、その銃口を向けた。 それを見た同時は、目を見開き、彼女を睨みつける。

銃口を向けられたガラス管の中の住人はと言つて、目を見開き、未だかつて見たことが無かつた“童子以外の人間”を物珍しそうに凝視している。

「アレが死ねば、童子さんは同行して頂けるとお？」

一秒ほどの沈黙の後、彼女は銃を握った手の人差し指……トリガーに、力を入れ、半分ほど引いた。 後数ミリで……弾丸が射出され、このままではガラス管を碎いてしまう。

「……止める！」

「もう遅いですよ」

ガリイインッ！

そんな発砲音とガラスの砕け散る音どが混ざり、室内を騒がす。

彼女は手を耳に当て、音の侵入を防ぐ。 だが、その行動が、間違っていた。

ガラス管を碎いた。そして、その中から ひ弱な腕が、銃を握つたその手を掴む！ ひ弱に見えるその腕からは、考えられないような怪力が、彼女の腕にかけられた。

「痛いですね、何事ですか？」童子さん……じゃ、あーりませんねえ」

真紅の瞳が、彼女の視界を覗き込んだ。それは猫のように背を曲げ、軽やかに飛び上ると、銃を蹴り飛ばした。そしてそこから相手の肩を掴み、足で背を固定し……放り投げる！

が、彼女はまだ、動けるらしい。コンクリートの壁に叩きつけられたにも関わらず、立つていられるその身体能力は敬服に値するが……その裏にはトリックがある。

「……人体強化手術でも受けたか？ 大方、人造人間技術でいつた強化細胞を身体に埋め込んでやがるな。両目潰しても三日で復活つてどこか」

「……中々良くな存知で。私の身体はもはやそれが主として構成されておりますゆえ……」

彼女の顔にっこでようやく、表情が浮かんだ。それは、恐怖と焦り。そして、その現況となつたのは……。

「ただ、そいつにも弱点はあるんだ」

童子は床に置いてあつた工具から、大きなレンチを手に取るとそれを振りかぶつた。その大きさは目算で約一メートル五十センチと言つた所だろう。その先端には、見るからに破壊力のありそうな金属の塊が、光沢をひけらかしている。

「手、足……背骨でも良い。どこかしらを粉碎骨折させれば、

どんなに早くてもお前らの技術では全治三週間つてトコだろ？」

童子はそれを、如月の右肩に振り下ろす！ 骨が砕ける感覚と、相手の苦痛の表情に。何も感じていないのか、彼は眉間に動かすことなく冷ややかな視線を送った。

「人海戦術で正しさを証明する天才共とは、繋がりを持ちたくないんだ。生憎な。ま、礼を言うべきか？ コイツがお前のおか

ホムシクルス

げで、外の世界に出て来れた事をよ

童子は自分の直ぐ後ろで、コーヒーメーカの中のコーヒーを舐めて悶えているそれを指差し、言い放つた。そして、壁に吊るしてあつた長い縄を手に取つた。

「安心しろ、命だけは保障してやる。けど、暴れられたら……取り押さえられなくも無いが面倒だ。レンチで砕かれるのと、縄で縛られるの。好きな方を選んでいいぞ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4965z/>

ドジとヘタレと残念な天才

2011年12月20日14時46分発行